今週の倫理

2024.3.9〜3.15

3月のテーマ　｜地球倫理

1376号

小さな「いのち」に触れ 自然への畏敬の念を育む

Mさんが住む家の庭には多くの雑草が生えています。毎年ナスやキュウリ、トマトを栽培する際に、その雑草を取り除くのですが、数日も経たないうちに、すぐ生えてきてしまうのです。そんな時、Mさんは「二度と生えてくるな」と言わんばかりに、仇のように雑草をむしり取って投げ捨てるのでした。

時期を問わず、取っても取っても生えてくる雑草に、嫌悪というよりも憎しみに近い感情を抱いていたMさんでしたが、ある些細なことをきっかけに、その思いが変わっていったのです。それは、「食虫植物」の存在を知ったことでした。

ある日、日用品を買うために近所のホームセンターに赴いたMさん。店内を巡っていると、園芸コーナーに見慣れない植物が展示してありました。それが、食虫植物だったのです。〈何だこれは！　面白い！〉と感動し、ひと目で興味が湧いたMさんは、その場で即、購入。自宅に帰って図鑑を片手に詳しく調べました。

購入した食虫植物の名は、ハエトリソウ。根から吸収する栄養だけでは足りないため、葉で虫を捕食し、栄養をとっていることが分かりました。ハエトリソウは二枚の葉が口のように開いていて、表面には六本のトゲがあり、このトゲに二回触れると葉を閉じ虫を捕らえるようになっています。

以来、Mさんは、毎日、このハエトリソウの世話をしました。帰宅すると、挨拶をするかのように葉に触れたり、水や肥料を与えたり、時に失敗しつつも、適切な世話の方法もわかってきたのでした。

そもそも、Mさんが、食虫植物を雑草のように嫌うことがなかったのは、自ら動くので雑草という意識が湧いてこなかったからだといいます。

加えて、毎日の世話を通して、ハエトリソウ、ひいては植物に対する気持ちが少しずつ変わっていきました。接している内に、愛おしさを感じるようになっていたのです。

そして、一年が経過する頃には、庭の草を取り除く時の気持ちや態度もすっかり変わっていました。

かつては、乱暴に草を引き抜いては邪魔者と思っていたMさんでしたが、既にそのような思いはありません。庭や畑では野菜の成長のため、抜かなければならないものの、野原や山では土壌を覆い、土地の環境を構築するのに必要な存在です。〈ふさわしい場所で育つように〉という気持ちで、草を抜くときは丁寧に扱っています。Mさんにとって、今では草は尊い存在となったのです。

草を取り除くことに対して、それを育てること。この正反対の行動によって、Mさんは図らずも、自然の営みと生命に対する畏敬の念を抱くことができました。それは、食虫植物の小さな「いのち」に触れて生じた思いに他ならないでしょう。

このような思いを育んでいくことが、人と自然とのより良き関係を築く礎となるのではないでしょうか。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局